第11章

都市滞在と都市下層民の（勤労）意欲
―― 結びにかえて

第1節　都市滞在と勤労意欲の変容

結びにかえて，移動者が都市下層民として都市に滞在するにつれて，都市下層民はどのような変容を経験することになるのかを，仮説的にまとめることにしたい。

すでに，宗教番組愛好者などについて行った（第Ⅱ部第9章参照）のと同じことを，ここでは，特定の番組愛好者だけでなく，調査各地区の住民全員に行うのである。都市へ移動して10年以下の移動者を短期都市滞在者とし，11年以上の滞在者を長期都市滞在者とする。また，都市生まれである非移動者は，こうした都市への移動者の子供たちであると想定し，非移動者の態度と行動を都市第二世代の態度や行動と見なす。こうした仮定に従うと，都市への移動者の態度や行動は短期滞在者のものから，長期滞在者のものとなり，その後非移動者（都市第二世代）のものとなると仮定できる。また，移動者の態度と行動のうち農村出身者の態度と行動に関しても検討する。農村出身者の数が多いことや，農村からの流入者がたびたび楽天的な行動を取り易いという傾向を，検討することにもなるためである（第Ⅱ－23図参照）。

(イ)　首都アンカラ

アンカラでは，短期滞在者は順応的態度を有し（拒否反応2.08，意欲3.75，

意欲に関しては第Ⅱ－19表参照)，アンカラ平均（2.91）よりも高い不満（3.00）を示し，改革行動（4＋，第Ⅱ－23図参照）に傾斜する。次いで，長期滞在者は敵意内抱的態度（2.27，3.22）を有し，長期滞在者も高い不満（2.97）を示して敵意噴出行動（2＋）に傾斜する。これに対して，非移動者は再び順応的態度（2.0，3.44）を有するけれども，不満（2.50）は低いので順応行動（4）に傾斜することになる。また，農村出身者は低い拒否反応（2.16）と低い勤労意欲（3.27）の喪失的態度を有し，高い不満（2.96）を示すので，彼らは諦観行動（3＋）に傾斜することになる。こうした作業を以下でも行い，指数はここでは示さないで要約すると第Ⅱ－23図ができる。

(ロ) 地方大都市ガジアンテップ

中心地区では，短期滞在者はアンカラと同じく，順応的態度を有し，高い不満を示すので改革行動（4＋）に傾斜する。こうした短期滞在者の改革行動への傾斜は，ガジアンテップの郊外地域でもみられ，アンカラや地方大都市という都市の短期滞在は，移動者に改革行動（4＋）への傾斜という改革的な姿勢を与える。

ガジアンテップの中心地区では，長期滞在者は潜在的戦闘的態度を有することに変わる。しかし，高い不満を示すことは変わらないので，かれらは積極的イスラム行動（1＋）に傾斜する。非移動者は，短期滞在者と同様に順応的態度を有し高い不満を有するので，改革行動（4＋）へ傾斜する。また，農村出身者は潜在的戦闘的態度を有し，高い不満を示すので積極的イスラム行動（1＋）に傾斜する。この中心地区では長期滞在者と農村出身者が積極的イスラム行動に傾斜するのである。

ガジアンテップの郊外地区では，すでに述べたように，短期滞在者は改革行動（4＋）に傾斜するけれども，長期滞在者は喪失的態度を有し，高い不満を示すため，諦観行動（3＋）に傾斜するようになる。しかし，非移動者は潜在的戦闘的態度を有し，高い不満を示すので，積極的イスラム行動（1＋）に傾斜する。また，農村出身者はこの郊外地区では，アンカラの地区と同様に，低い拒否反応と低い意欲しか持たないが，不満は高い諦観行動（3＋）に傾斜

する。

(ハ)　新興工業中大都市メルシン

新興工業都市であり，非宗教的な都市メルシンの3地区では，郊外（農村風）地区セルジュク地区では短期滞在者は低い拒否反応と低い意欲の喪失的態度を有し，高い不満を有するので諦観行動（3＋）に傾斜する。長期滞在者は高い勤労意欲を強化することに成功して順応的態度を有し，高い不満を持つので改革行動（4＋）に傾斜するように変わる。次に，非移動者は再び勤労意欲を低下させ，敵意噴出行動（2＋）に傾斜する。また，農村出身者は短期滞在者と同様に諦観行動に傾斜する（3＋）。

準中心地区シテラル地区には非移動者はいない。この地区では短期滞在者はアンカラやガジアンテップと同様に改革行動（4＋）に傾斜する。長期滞在者は潜在的戦闘的態度を有し，不満はちょうどアンカラと同じ水準であり，積極的イスラム行動と地区の指導者行動の境界的な行動（1＋－）に傾斜する。次に，農村出身者は地区の指導者行動に傾斜する（1）。

東南部地域からの流入者が多いデミルタシュ地区では，短期滞在者は高い勤労意欲は有さないか，拒否反応は高く，また，不満も高くて敵意噴出行動（2＋）に傾斜する。しかし，長期滞在者は拒否反応を弱め，逆に，勤労意欲が高くなり順応的態度を有し，不満は低くて，順応行動（4）に傾斜する。これに対して，非移動者は順応的態度をとりながらも，不満は高くて改革行動（4＋）に傾斜する。農村出身者は長期滞在者と同様に，順応的態度をとりながらも不満は高くないために，順応行動（4）に傾斜する。

(ニ)　中都市トラブゾン

不満の低い中都市トラブゾンの三つの地区のうち，中心地区ザファール地区では，短期滞在者も長期滞在者も潜在的戦闘的態度を有し，低い不満しか示さないため，地区の指導者行動（1）に傾斜する。これに対して，非移動者は拒否反応が低くなって，順応的態度を有し低い不満しか示さないために，順応行動（4）に傾斜する。農村出身者は，短期，長期の移動者と同じように，地区の指導者行動（1）に傾く。中心地区ザファール地区では移動者が自

文化への高い自信と高い意欲を有し，不満は低いのである。

最も豊かな中心地区エセンテッペ地区では，短期滞在者の勤労意欲は低くて敵意内抱的態度を有する。不満は高いため敵意噴出行動（2＋）に傾斜する。これに対して長期滞在者では勤労意欲が高まり，拒否反応は弱まるため，順応行動（4）となる。非移動者では勤労意欲が再び低下し，また，不満は低いため，改革行動と現状容認行動の境界的な行動に傾斜する（3／4）。農村出身者は長期滞在者と同じ順応行動（4）をとる。豊かな中心地区エセンテッペ地区では短期滞在者が高い拒否反応を示すだけで，他の集団は拒否反応を低下させる。

郊外地区のバフチェジック地区では，拒否反応は基準（2.21）に等しく，短期滞在者は勤労意欲（2.80）が低く，不満も低くて（2.40），敵意内抱行動（2）と現状容認行動（3）の境界的な行動（2／3）に傾斜する。長期滞在者は拒否反応が強まり，不満も高まって敵意噴出行動（2＋）に傾斜する。これに対して非移動者では拒否反応が低下し，また，勤労意欲が高まり不満は低く順応行動（4）に傾斜する。農村出身者は，短期，長期の滞在者と全く異なり，地区の指導者行動（1）に傾斜する。

(ニ) 小都市ネブシェヒル

エセンテッペ地区に次いで豊かなネブシェヒルの350エブレル地区では，短期滞在者も長期滞在者も低い勤労意欲と高い拒否反応の敵意内抱的態度を有する。ただし，不満は低くて，敵意内抱行動（2）となる。これに対して，非移動者は潜在的戦闘的態度を有し，不満も高くて積極的イスラム行動（1＋）に傾斜する。また，農村出身者は敵意内抱行動（2）に傾斜する。

(ホ) 地方町ビュンヤン

地方町ビュンヤンの二つの地区のうち，中心地区では短期滞在者は低い勤労意欲と低い拒否反応という喪失的態度を有し，不満も低くて現状容認行動（3）に傾斜する。これに対して長期滞在者は拒否反応が高まり，また，不満も高まって，敵意噴出行動（2＋）に傾斜する。非移動者はやや不満が低くなり（高低の境界線上），敵意噴出行動と敵意内抱行動の境界的な行動（2＋－）

に傾斜する。また，農村出身者は勤労意欲が高低の境界線上にあり，拒否反応は高いが，不満は低いので，地区の指導者行動と敵意内抱行動の境界的な行動（1／2）に傾斜する。

ビュンヤンの郊外地区では，短期滞在者は潜在的戦闘的態度を有し，不満は低く地区の指導者行動（1）に傾斜する。長期滞在者は拒否反応が低下するが，不満は高まるため，改革行動（4＋）に傾斜する。これに対して非移動者は低い勤労意欲と低い拒否反応の喪失的態度を有し，不満も低いので現状容認行動（3）となる。農村出身者は長期滞在者と同様に順応的態度を有するけれども，不満が低いので順応行動（4）に傾斜する。

社会的行動への傾斜は，短期滞在者，長期滞在者，非移動者（都市第二世代）の順に推移すると仮定すれば，都市と地区によって社会的行動への特徴ある推移を示す。意欲が高くて拒否反応の高い潜在的戦闘的態度をとり，しかも不満の高い積極的 a）イスラム行動に傾斜する地区と，不満の低い b）地区の指導者行動に傾斜する地区ごとに各集団（移動関連集団）を整理しておく。

a）積極的イスラム行動（1＋）の集団（移動関連集団）は，3地区（地方大都市と小都市）に限って存在する。地方大都市ガジアンテップにおいては中心地区で2集団と多いし（長期滞在者と農村出身者），郊外地区では1集団が存在する（非移動者）。新興工業都市メルシンに該当集団は存在しない（準中心地区シテラル地区の長期滞在者は地区の指導者行動と混在している）。満足した中都市トラブゾンにも該当集団は存在しない。小都市ネブシェヒルでは，1集団が存在する（農村出身者）。地方町に該当集団は存在しない。

b）地区の指導者行動（1）の集団（移動関連集団）は，5地区（中大都市以下の3都市）に存在する。新興工業中大都市メルシンでは準中心地区シテラル地区に集中して2集団がみられる（農村出身者，長期滞在者はすでに述べた積極的イスラム行動と混在）。満足した中都市トラブゾンでは，中心地区ザファール地区に集中して3集団（短期滞在者，長期滞在者，農村出身者）がみられ，郊外地区バフチェジック地区には1集団がみられる（農村出身者）。小都市にはみられず，地方町では中心地区と郊外地区にそれぞれ1集団みられる。中心地

区では農村出身者（敵意内抱行動と混在），郊外地区では短期滞在者である。

第2節　都市滞在と勤労意欲の推移について

調査地域における都市滞在時期と流出地域ごとの集団は，以上のような態度を有し，社会的行動に傾斜した。以下では，勤労意欲に限定していかなる地域のいかなる集団が都市滞在の過程で勤労意欲を高め，いかなる集団が低めているのかをみていこう（第Ⅱ－19表）。

第Ⅱ部第9章で定義し宗教番組愛好者に関して分析したように，ここでも意欲の推移の型を次のように想定する。長期滞在者の意欲が短期滞在者の意欲より高くなるとき，a）勤労意欲は「強化」したと呼び，低くなるときは，b）勤労意欲は「衰退」したと呼ぶ。また，都市第二世代（非移動者）の意欲が長期滞在者の意欲より高くなるときは，勤労意欲は「確立」したと呼び，低くなるときには「非確立」したと呼ぶ。短期滞在者意欲と長期滞在者の意欲，長期滞在者の意欲と都市第二世代（非移動者）の意欲の二つの関係から，勤労意欲は「強化・非確立型」などができる。とくに，勤労意欲が短期滞在者よりも長期滞在者で高く，しかも長期滞在者よりも都市第二世代で高くなり，さらに，アンカラの地区平均の勤労意欲を越えるときに限って，勤労意欲は「本来の強化・確立型」と呼ぶことにする（第Ⅱ－24図－1参照）。

(イ)　アンカラ地区では，勤労意欲は短期滞在者（平均年齢37.2歳）の間では高いが（3.75），長期滞在者（平均年齢48.1歳）では低下する（3.22）。そして非移動者ではやや高くなる（3.44）。すなわち，10年以上前にアンカラに流入した長期滞在者は都市生活の中で勤労意欲を失うけれども，都市第二世代は勤労意欲を回復させてアンカラの地区平均（3.33）よりも高くして（264ページ参照），勤労意欲を「確立」させる（第Ⅱ－24図－1，折れ線1参照）。しかし，農村出身者は都市生活の中で低い勤労意欲を有するままである。それ故，アンカラは，農村出身者低の，勤労意欲は「衰退・確立型」の地区であ

るといえよう。

(ロ)　伝統的な工業都市ガジアンテップでは，中心地区の短期滞在者は高い勤労意欲（3.43）を有し，しかも，長期滞在者は勤労意欲をさらに強化し（4.23）積極的なイスラム行動の担い手となる。非移動者は勤労意欲を低めて確立することはできないが，高い水準を維持する（3.50）（折れ線2参照）。また，この地区の農村出身者はきわめて高い勤労意欲を有する（4.14）。ガジアンテップの中心地区は，農村出身者高の，勤労意欲は「強化・非確立型（維持型）」の地区であるといえよう。

また，ガジアンテップの郊外地区では短期滞在者（平均年齢38.0歳）は高い勤労意欲を有するけれども（3.67），長期滞在者（平均年齢44.3歳）は勤労意欲を衰退させる（3.06）。しかし，第二世代である非移動者（平均年齢65.0歳）は，大いに勤労意欲を「確立」する（5.0，折れ線3参照）。すでに述べたように，この非移動者は積極的イスラム行動に傾斜するのである。農村出身者は低い労働意欲（3.21）しか有しない。ガジアンテップの郊外地区は，アンカラ地区の属性を増幅させた型である。すなわち，農村出身者低の，勤労意欲は「衰退・確立型」の地区であるといえよう。

(ハ)　新興工業都市で非宗教なメルシンにおいては，郊外（農村風）地区セルジュク地区では短期滞在者は低い勤労意欲しか有しないけれども（2.66），長期滞在者は勤労意欲を強化する（3.50）。しかし，第二世代である非移動者は高い勤労意欲を喪失する（2.50，折れ線4参照）。また，農村出身者は低い勤労意欲しか有していない（3.21）。要するに，この地区では10年以上前に流入した長期滞在者だけが高い勤労意欲を有するのである。郊外（農村風）地区セルジュク地区は，農村出身者低の勤労意欲は「強化・非確立型」の地区である。

準中心地区のシテラル地区は非移動者（都市第二世代）は存在しない。短期滞在者は高い勤労意欲を有し（3.54），長期滞在者は勤労意欲をさらに強化している（3.93，折れ線5参照）。この地区では，農村出身者も高い労働意欲を有する（3.36）。準中心地区シテラル地区は，ガジアンテップの中心地区に似て，農村出身者高の，勤労意欲は「強化」型である。都市第二世代を欠くため，

勤労意欲強化型であっても確立型か否かは判断できない。

東南部地域からの流入者の多い郊外地区デミルタシュ地区では，短期滞在者はアンカラ地区平均とほぼ同水準の勤労意欲を有する（3.31)。長期滞在者は勤労意欲を強化し（3.57)，非移動者は勤労意欲をさらに高めて確立する（4.00，折れ線6参照)。また，農村出身者も高い勤労意欲を有する（3.59)。郊外デミルタシュ地区は，農村出身者高の，勤労意欲「強化・確立型」であり，しかもアンカラの地区平均を越えているので「本来の強化・確立型」といってよい。

(二) 中都市トラブゾンにおいて，中心地区ザファール地区では，短期滞在者は高い勤労意欲を有し（3.67)，長期滞在者は勤労意欲を強化している（3.76)。また，非移動者は勤労意欲をやや低くめ，確立はしていないが高い勤労意欲を維持している（3.67，第Ⅱ－24図－2，折れ線7参照)。農村出身者も基準より（アンカラ地区平均3.33）高い勤労意欲を有する（3.60)。中心地区ザファール地区は，農村出身者高の，勤労意欲は「強化・非確立（維持）型」であるといえよう。

豊かな中心地区エセンテッペ地区では，短期滞在者は低い勤労意欲しか有しない（3.00)。長期滞在者は勤労意欲を大いに強化する（3.61)。しかし，非移動者は勤労意欲を低くめ，基準（アンカラの地区平均3.33）は維持するけれども確立はしていない（3.33，折れ線8参照)。農村出身者はやや高い勤労意欲を有する（3.40)。豊かな中心地区エセンテッペ地区は，農村出身者高の，勤労意欲は「強化・非確立型」の地区であるといえよう。

郊外地区バフチェジック地区では，短期滞在者は高い勤労意欲は有しない（2.80)。けれども，長期滞在者は勤労意欲を基準までは強化している（3.32，折れ線9参照)。非移動者は勤労意欲を高め確立する（3.60)。農村出身者はわずかに基準よりも高い労働意欲を有する（3.35)。学歴構成の高い郊外地区バフチェジック地区は，農村出身者高の，勤労意欲は「強化・確立型」であり，しかも，アンカラの地区平均より高いため「本来の強化・確立型」といってよい地区である。

(ホ)　小都市ネブシェヒルの豊かで高い学歴構成の350エブレル地区では，短期滞在者は低い勤労意欲しか有しない（3.25）。しかも，長期滞在者は低い勤労意欲を維持する（3.25）。しかし，非移動者は勤労意欲を高めて確立する（3.86，折れ線10参照）。農村出身者は低い勤労意欲にとどまる（3.03）。豊かで学歴構成の高い350エブレル地区は，農村出身者低の，勤労意欲は「維持・確立型」である。

(ヘ)　地方町ビュンヤンの中心地区では，短期滞在者は低い勤労意欲しか有さず（3.00），長期滞在者は低い勤労意欲を強化するけれども低い水準にとどまる（3.25）。非移動者も勤労意欲を維持するけれども，低い水準に留まる（3.28，折れ線11参照）。農村出身者は基準と同じ水準の勤労意欲を有する（3.33）。地方町の中心地区は，農村出身者は並の，勤労意欲は「強化・維持型」ではあるけれども，勤労意欲が低い水準にあるので「低水準停滞維持型」といえよう。

地方町の豊かな郊外地区では，短期滞在者は高い勤労意欲を有し（4.00），長期滞在者は低下させ勤労意欲を衰退させるが，基準よりは高い水準を維持する（3.78）。しかし，非移動者は勤労意欲を著しく低下させ確立していない（3.09，折れ線12参照）。農村出身者は高い勤労意欲を有する（3.81）。地方町の豊かな郊外地区は，農村出身者高の，勤労意欲は「衰退・非確立型」である。

都市滞在にともなって都市下層民の勤労意欲が強化され確立され，しかも，ある水準（例えば，アンカラの地区平均3.33）を上回る地区があれば，そうした地区への都市流入者が短期滞在者から長期滞在者になり，さらには，都市第二世代（非移動者）になっていく過程において，都市下層民が，勤労意欲，さらにいえば，自文化や自らの生活様式に自信と信頼を高めながら都市生活を営むことをすすめるような都市環境が存在するといえる。また，そうした環境を形成する条件は，経済的（収入，職業，住宅の点など）や社会的に（学歴，生活実感の点など），どのようなものであるのかを考えることを可能にする。さらに言えば，こうした都市環境を備えた居住地区や居住都市を見いだすことによって，都市下層民支援型の都市化の条件をトルコ社会の内部から，さ

らには第三世界の内部から考える手がかりを与えてくれるのである。

勤労意欲の強化や確立に関して，6都市12調査地区の型を検討してきた。

都市下層民支援型の都市化に，第1に適合的な勤労意欲推移の型は，「本来の強化・確立型」である。この型は，新興工業都市メルシンの，東南部からの流入者の多かったデミルタシュ地区（折れ線9）であり，また，中都市トラブゾンの，高学歴構成を示したバフチェジック地区（折れ線7）の2地区である。また，メルシンの準中心地区シテラル地区（折れ線5）は，都市第二世代である非移動者を欠くけれども，その高い勤労水準の「強化型」は，「本来の強化・確立型」への可能性を有する。

都市下層民支援型の都市化に，第2に適合的な勤労意欲推移の型は，「衰退・確立型」である。都市第二世代である非移動者が長期滞在者よりも勤労意欲を高め，しかも基準（アンカラの地区平均）よりも高い型である。この型は，小都市ネブシェヒルで豊かな高学歴構成の350エブレル地区（折れ線10）であり，地方大都市ガジアンテップの郊外地区（折れ線3）である。

都市下層民支援型の都市化に，第3に適合的な勤労意欲推移の型は，「強化・非確立（維持型）」である。都市第二世代である非移動者は長期滞在者より勤労意欲を低くするけれども，短期移動者よりは勤労意欲を高めるか，あるいは，短期移動者の高い勤労意欲を維持する型である。この型は，地方大都市ガジアンテップの中心地区（折れ線2）であるし，中都市トラブゾンの中心地区ザファール地区（折れ線7）である。

逆に，以上の型とは対極にある，都市滞在に伴って都市下層民が勤労意欲を低下させる「衰退・非確立型」や，低い水準の「強化・非確立型」という，都市下層民非支援型の都市化の対応する地区は，地方町ビュンヤンの豊かな郊外地区（折れ線12）と新興工業都市メルシンの郊外（農村風）セルジュク地区（折れ線4）である。

勤労意欲，さらに敷衍すれば意欲に関する二つの対極にある型の地区の構成要件を検討すれば，都市下層民支援型でかれらの意欲を向上させる都市化の経済的社会的な条件も推定可能となるといえよう。